

「お前の夢、俺が買ってやるよ」地下アイドルがカメラの前で、敏腕プロデューサーに初めてを全部奪われるカントボーイ

「っ……♡ や、やだ……見ないで……っ♡♡」

声が震えている。自分の声じゃないみたいだった。ベッドの縁に座らされて、膝の間に黒崎の長い指が触れている。まだ何もされていない。指先が内腿の薄い皮膚をすべっただけ。それだけなのに、下腹がきゅう、と痙攣した。

「……3回、お前のステージを観た」

黒崎の声は低い。甘い煙草の匂いがスーツの襟から漂ってくる。銀縁眼鏡の奥の瞳が、ユウを見下ろしていた。

「他のメンバーにはない色気がある。——埋もれさせるには惜しい才能だ」

(嘘だ)

ユウは心の中で呟く。色気なんてない。あるのはコンプレックスだけだ。ステージに立つたびにサポーターとテープで股間を固めて、汗をかくたびにずれないか怯えて、トイレは必ず個室で、着替えは誰よりも早く済ませる——そうやって隠してきた。男の身体に、あるはずのないものがある。それを「色気」なんて呼ばないでほしい。

「テスト撮影する。——脱いでくれ」

「は……っ？」

ここに来るまでの経緯が頭の中でぐるぐる回る。写真集の企画。プロダクション持ちの制作費。書店とネット販売での

流通。——お前の名前を、ライブハウスの外に出してやれる。

家賃2ヶ月滞納。チケットノルマの自腹。契約更新まで3週間。

パーカーを脱いだ。タンクトップを脱いだ。薄い鎖骨が剥き出しになって、室内の冷氣に乳首がつん、と硬くなる。

「……きれいだな」

黒崎がカメラの後ろからそう言った。シャッター音がぱしや、ぱしやと鳴る。

「ズボンも」

「え……っ」

「下着姿まででいい」

震える手でジーンズを下ろした。黒のボクサーブリーフ。
——股間が、平坦だった。

沈黙が落ちた。三脚のカメラの赤いランプだけが、ちかちかと瞬いている。

黒崎がファインダーから目を離した。ゆっくりと歩いてくる。革靴の音がカーペットに吸い込まれる。ベッドの横に立ち、ユウを見下ろした。

「テープ巻いてるだろ」

心臓が止まった。

「——外せ」

「な、なんで……っ♡♡」

「お前のステージでの脚の閉じ方。トイレに行く頻度。着替えの時に人を避ける癖」

黒崎が屈み込む。銀縁眼鏡の向こうの目が、笑っていなかった。

「全部見てた。——俺はプロだよ、藤宮」

(バレてた——)

視界が滲む。2年間必死に隠してきたものが、最初から見透かされていた。この男は知っていてここに連れてきた。写真集も、テスト撮影も、全部——

「安心しろ。むしろ、お前の価値が跳ね上がった」

黒崎の声が半音下がる。

「カントボーイの映像——お前を欲しがる客は、お前が思ってるより桁違いに多い」

「っ……♡♡」

「テープ外せ。——それとも、帰るか？ 帰ったら企画は白紙だ。来月の契約更新、どうするんだ？」

指が震えていた。目から涙が一筋こぼれた。ボクサーブリーフの中に手を入れて、テープを剥がす。ぺり、ぺり、と皮膚から剥がれる音が静かな部屋に響いた。

下着を下ろす。

リングライトの白い光が、ユウの股間を照らした。男の身体についた、小さなカント。薄いピンクの割れ目。産毛もほ

とんどない。誰にも見せたことがない、誰にも触れさせたことがない——ユウの秘密そのものが、赤いランプの前に曝された。

「——最高の素材だ」

黒崎が顎を掴んだ。ユウの顔を持ち上げ、真正面から覗き込む。

「お前の夢、俺が買ってやるよ」

唇が耳に触れるほど近い。

「もっと売れる方法、教えてやろうか」

「ひっ……♡♡」

その一言で、ユウの身体がびくりと反応した。怖い。怖いのに、下腹の奥がじんわり熱くなっていく。

——ここから逃げたら、全部終わる。

ユウは小さく頷いた。

黒崎がユウの肩を押し、ベッドの中央に仰向けに寝かせた。リングライトが真上から照らす。カメラの赤いランプが、ユウの小さなカントの正面を捉えていた。

「プロデューサーとして、商品の性能を把握する必要がある」

黒崎がジャケットを脱ぎ、袖を捲った。長い指。綺麗に整えられた爪。高級腕時計が間接照明にちらりと光る。

「脚、開け」

「しょ、商品……♡♡？」

「そうだ。俺が値段をつけて、俺が売る。お前は商品だよ、藤宮」

（商品——）

その言葉がユウの胸の奥深くに突き刺さる。アイドルとして売れたかった。ステージの上で光りたかった。なのに今、ベッドの上で脚を開けと言われている。

——でも。

（このチャンスを逃したら、もう次はない）

ゆっくりと膝を開いた。カントがカメラの前に晒される。薄いピンクの割れ目が、リングライトに照らされてうっすらと光を帯びていた。

黒崎の中指が近づいてくる。長い指先が割れ目の上端に触れた。

すう、と一筋だけ。上から下へ。

「ひんっ……♡♡」

腰が浮いた。自分のカントに触れたことすらほとんどない。他人の指が触れたのは生まれて初めてだった。電流みたいな感覚が下腹を貫いて、脳天まで突き抜ける。

「触られたことないだろ、ここ」

「さ、触ってません……っ♡♡ 自分でも……っ♡♡」

「処女か。——それも商品価値だ」

指先がクリトリスの包皮をそっと押し上げた。隠れていた小さな突起が剥き出しになる。人差し指の腹が、ちょん♡と触れた。

「ンッ♡♡♡ やっ……そこ触っちゃ……っ♡♡♡」

（なに、これ——♡♡ 指一本でこんな——♡♡）

今まで知らなかった。こんな感覚が自分の身体にあることを。男として生きてきた。男の身体のはずなのに、ここだけが違う。ここだけが、男じゃない反応をする。

黒崎の指が円を描き始めた。くる♡くる♡と、丁寧に。クリトリスの表面を指の腹が這うように回る。

「ひうっ♡ ひうっ♡♡ あっ♡♡ へ、変な感じ……っ♡♡ やだっ♡♡ 変な感じするう……っ♡♡♡」

「変な感じじゃない。気持ちいいんだろ。——正直に言え、藤宮」

「ッ……♡♡♡」

（気持ちいいなんて——認めたくない♡♡ 男なのに♡♡ こんなところ触られて気持ちいいなんて♡♡）

でも身体は嘘をつけない。膝がびくびく震える。呼吸が浅くなる。自分の意思とは関係なく、カントの奥からじわっ♡♡と熱いものが滲み出してくる。

「き……気持ちっ♡♡ いい……です……っ♡♡♡」

声に出した瞬間、涙がぼろぼろ零れた。認めてしまった。
男なのに。カントに触られて気持ちいいと、口に出してしま
った。

黒崎の指が下にすべる。割れ目を割って、入り口の周りの
柔らかい肉をなぞった。ぬるっ♡と指に透明な液体が絡みつ
く。

「もう濡れてる」

「やだぁ……っ♡♡ 見ないで……っ♡♡ そんなの撮らな
いで……っ♡♡」

黒崎は濡れた指先をカメラに向けて見せた。透明な糸が指
とカントの間に架かって、リングライトにきらきら光る。

「全部記録しとくからな。お前がどんな顔で感じるか、どこ
を触ったらどう鳴くか。——データは多いほうがいい」

中指が入り口にあてがわれた。先端がぬる♡♡と沈む。

「ひぁっ♡♡♡ ゆ、指っ……入れないでっ♡♡ おまんこ
っ♡♡ こわいっ♡♡♡」

自分で言ってしまった。おまんこ。男なのに。自分のカント
のことを、おまんこと。

「怖くない。お前の身体はちゃんと準備してる。——ほら、
吸い込んでるだろ」

ずぶっ♡♡——指が第二関節まで沈んだ。

「んぐうっ♡♡♡」

内壁がきゅう♡♡と指を締めつける。異物が入ってくる圧迫感。それを押し返そうとする肉壁の収縮が、結果的に指を吸い込んでいく。自分の身体が勝手に指を欲しがっているみたいで、ユウは目を固く瞑った。

「きつ……処女まんこだな。奥の肉、一度も使われてない感触がする」

「おっ……♡♡ な、中に……っ♡♡ 指が入ってるう……♡♡♡」

黒崎が指を動かし始める。中の壁をなぞるように、くると回して、引いて、また押し込む。ずちゅ♡ずちゅ♡と水音が生まれた。

「ジっ♡ ジっ♡♡ あ……あっ♡♡ 動かさないでっ♡♡ 中でっ♡♡ 指があ♡♡♡」

（こんな音——♡♡ 僕のおまんこからこんなえっちな音がしてる——♡♡ やだ♡♡ やだよ♡♡ 男なのに♡♡）

黒崎の指先が、ざらついた場所を見つけた。前壁の少し奥。ぐりっ♡と押す。

「——ここか」

「ひおおっ♡♡♡♡ なにっ♡♡ そこ触ったらおかしくなるっ♡♡♡♡」

腰が跳ねた。シーツを掴んだ指が白くなる。頭の奥が明滅して、快感が突き上がってくる。

「Gスポットだな。お前のは浅い位置にある。指でも届く。
——ちんぽなら毎回当たる位置だ」

「ちっ♡♡ ちんぽとかっ♡♡ 言わないでっ♡♡♡」

「何を恥ずかしがってるんだ。お前のここは、ちんぽを受け入れるための穴だろ」

ずちゅっ♡ずちゅっ♡ずちゅっ♡——Gスポットを集中的に擦り上げる。背中が弓なりに反った。

「おっ♡おっ♡おっ♡♡ やだっ♡♡ 声出ちゃっ♡♡ カメラに録られてるのにっ♡♡ 声がとまらないっ♡♡♡」

「止めなくていいよ。いい声だ、藤宮。——お前のその喘ぎ声に金を払う客がいるんだ」

黒崎が指を二本に増やした。ぐちゅっ♡と卑猥な音が弾ける。きつい肉壁が二本の指を締めつけて、同時にとろとろと蜜を溢れさせた。

「おおおっ♡♡♡ 2本っ♡♡ 2本入ってるっ♡♡♡ おまんこ裂けちゃうっ♡♡♡」

「裂けないよ。おまんこはちんぽが入るようにできてる。指二本で騒いでたらこの先もたないぞ」

(この先——♡♡ この先ってっ♡♡ まさか——♡♡)

二本の指がカントの中を掻き回すたびに、ぐちゅぐちゅと水音が大きくなる。内壁が指を吸って、離して、また吸って——カントが勝手に快感を貪っていた。

ぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡——指がGスポットを擦りながら、親指がクリトリスを捏ね始めた。二箇所同時。ユウの腰が制御を失った。

「おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡♡ だめっ♡♡ なんかくるっ♡♡ なんかきちゃうっ♡♡ おまんこからなんか出ちゃうっ♡♡♡」

「出せ。カメラの前で出せ。——お前の最初の潮吹き、俺が貰ってやるよ」

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡♡♡——

「おおおおおっっ♡♡♡♡ イグッ♡♡ イッちゃうっ♡♡ おまんこイッちゃうよおっ♡♡♡♡」

ぷしゃああっ♡♡♡

シートが濡れた。黒崎の手と腕が濡れた。全身がびくびくと痙攣して、目から涙が止まらない。19年間一度も感じたことのない場所が、知らない男の指で初めて壊れた。

「ば……♡♡ ば……♡♡ ば……♡♡」

黒崎は指を抜かなかった。イッた直後の敏感な内壁を、ぐりっ♡ぐりっ♡とゆっくり回す。

「ひうっ♡♡♡ イったばかりなのにつ♡♡ 中で指まわさないでえっ♡♡♡」

「イった後のほうが感度が上がるんだよ」

黒崎がユウの耳元に唇を寄せた。